collab collective

最新の状態を長期間維持できる会議室の構築方法

進化し続けなくてはならないスペースで、最初に整えるべき5つのポイント



会議室は、利用初日にはうまく機能していました。しかし、それが問題です。

機器は役割を果たしていました。

会議室に求められる役割が変わったのです。

ほとんどの会議室に足を踏み入れると、表面上はすべてが順調に見えます。ハードウェアは機能し、マイクは音声を拾い、会議はさしあたり問題なく始まります。もともと各スペースは仕様通りに作られており、導入初日には求められたものを正確に提供していました。これらの会議室は修理を必要としているわけでもありません。しかし、ビジネスのニーズを満たす能力は年々少しずつ低下しています。それは、組織がこれらのスペースに対して、当初の設計では考慮されていなかった機能を求め続けているからです。

私が観察してきたパターンは次の通りです。会議スペースは一度構築されると、最長で10年間使用され続けます。その中の機器は、4年から8年ごとに更新されます。また、その会議室で稼働しているユニファイドコミュニケーション（UC）プラットフォームは、数か月ごとに新しい機能に対応する必要があります。新しいハードウェアには、導入初日に会議室で必要とされる以上の処理能力とセンサー機能が備わっており、その性能面の余力をソフトウェアが活用することで、新しい機能を追加できます。要求が緩やかに増加していた間は、その仕組みでうまくいっていました。今日のコラボレーションに対するニーズは、あらゆる会議室に対して、これまで以上に多くのことを、かつてないスピードで求めています。そして、性能面の余力を使い切ってしまうと、ソフトウェアをアップデートしても、その余力を取り戻すことはできません。

興味深いことに、こうしたパターンは2種類のスペースで見られますが、その状況は全く異なっています。







1つ目は、標準的な会議室です。長方形や舟形のテーブルが置かれている、固定されたお馴染みのレイアウトの中〜大会議室で、どの施設にも多く見られるものです。こうした会議室は、そこで稼働しているプラットフォームで今求められているものや、そうしたプラットフォームの使われ方に追いつけなくなってしまいました。Teams、Zoom、Meet では、その会議室にはないキャプチャ機能とコンピューティング能力が求められています。

2つ目は、大規模または多目的なスペースです。分割可能な会議室、役員会議室、全社員が集まるスペースなどがこれに当たります。こうしたスペースにも同様に性能面の余力が不足するという課題があり、さらに、レイアウトが変化するという別の問題もあります。役員会議室は、教室形式、U 字型、または小グループ形式に模様替えされますが、多くの場合、1種類、あるいはせいぜい2種類のレイアウトのためだけに、外部のインテグレーターによるカメラやマイクのカスタム構築が必要になります。備品を動かすと会議室のパフォーマンスが低下し、それを元に戻すためには通常、インテグレーターを呼び戻す必要があります。時代遅れになった標準的な会議室には、より高性能な新しいビデオバーが必要です。人々の利用ニーズに合わなくなった多目的スペースは、新たな統合プロジェクトの場となります。こうした会議室は比較的少ないものの、最も多くの労力を必要とします。

どちらのタイプの会議室においても、IT 部門は可能な限り性能面に余力があるものを購入しますしかし、プラットフォームが数か月ごとに変化する一方で、会議室は何年も使用され続けます。従業員は、性能面の余力が不足した状態を受け入れざるを得ません。会議自体は行われるため、チケットを発行する人はほとんどいません。単に業務が増えるだけであり、会議体験の低下も程よく緩やかであるため、報告に値すると感じられる会議は一つもないのです。その代わりに、人々は次のような問題に対処しながら働いています。

- リモート参加者は、長いテーブルの端にいる人々をはっきりと見ることができません。
- 声がエコーや室内の騒音と混ざり合うため、リモート参加者は内容の理解に苦労します。
- 誰かが空いている会議室を探してフロアを歩き回る一方で、予約済みの会議室が空室のままになっていることがあります。

時間が経つにつれて、人々は信頼できる会議室のみを予約し、それ以外は避けるようになります。そのことは、使用率の低下として表れます。これは収容可能人数の問題であるようにも読み取れますが、サポートダッシュボードは空のままです。私が調査する施設において、これは最も誤解されやすいシグナルなのです。

AI とハイブリッドワークが要求水準を上げた

要求がゆっくりと増加している間は、いずれの問題も何とかなっていました。
しかし、次の2つの変化がそれを終わらせたのです。

AI が全会議室の必須条件を引き上げている

かつては、会議プラットフォームに機能が追加されるのは年に2〜3回程度でした。それが現在では毎月追加されるようになり、そのほとんどは会議室のカメラ、マイク、処理能力に依存する AI 機能です。いずれの機能も、ハードウェアの刷新を待たずに追加されていきます。

ハイブリッドワークが全会議室の使われ方を変えている

会議のためにオフィスに来た人々は、リモートで参加する人々を含めた全員のために会議室が機能することを期待しています。分割可能な会議室は今やスタンダードであり、移動可能な備品も当たり前になっています。同じスペースが、午前中は役員会議室、午後は研修室になることもあります。

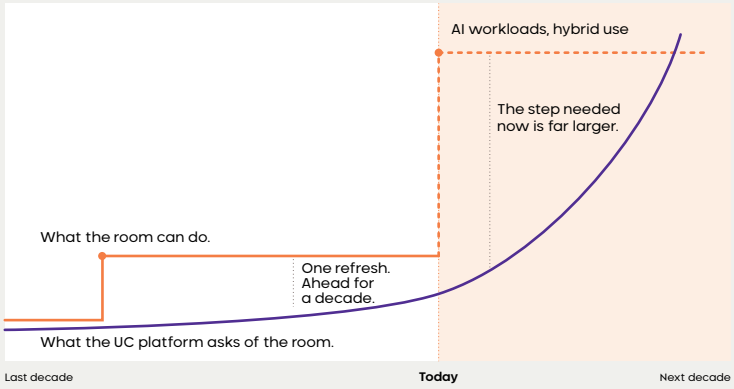
アップデートのたびに、どちらの種類の会議室もさらに時代遅れになっていきます。標準的な会議室では、新しい機能が必要とする処理能力やセンサーを追加することができません。その広いスペースは1種類のレイアウトを想定して作られたものですが、今では常にレイアウトを変更しなければなりません。新たな模様替えのたびにカメラやマイクの配置を変える必要があり、それを補うために、さらにカメラ、スピーカー、またはマイクが必要になることも少なくありません。こうしたスペースの大半では、どちらの需要に対しても、インテグレーターを呼び戻すことになります。会議室を使用する人々は自分たちでレイアウトの切り替えを行えるべきであり、デバイスの追加はケーブルを配線するだけで済むべきなのです。

会議室のデバイスは、耐用年数を終えるまで常に想定以上のことを求められてきましたが、優れたデバイスは余裕を持った性能で出荷されていたため、それに対応できていました。しかし、過去10年間会議室を支えてきた性能が、今後も通用するとは限りません。

では、最初に何を整える必要があるのでしょうか？次のセクションでは5つのポイントをご紹介し、それぞれに、すでに所有している会議室に適用できる調査も併せて記載します。

会議室のハードウェアは変化に対応しきれていません。私自身によるモデルでは、Windows ベースの会議室システムの場合4〜5年、Android ベースのシステムの場合5〜8年の耐用年数を見込んでいますが、多くの組織ではそれよりも長く使用しています。

かつては、1回新調すれば10年先の需要まで先取りすることができました。今後は、より険しい坂道を乗り越えなければなりません。



アナリストの見解：

「会議プラットフォームが要求水準を引き上げるたびに会議室の刷新に資金提供する人はいません。最初に何を規定するかが、実際にできる唯一の舵取りなのです。

— Craig Durr（チーフアナリスト、The Collab Collective）

ルームスケールインテリジェンス：
最初に整えるべき5つのポイント

たびたびの変更に耐えなければならない会議室には、優れた仕様書以上のものが必要です。以下は、私がどのような会議室にも求める5つのポイントであり、それぞれに、すでに所有している会議室に適用できる調査も併せて記載します。これらを合わせたものを、私は「ルームスケールインテリジェンス」と呼んでいます。**新たな会議室の費用を見積もる前に、すでに所有している会議室に適用できる5つの調査。**



性能面の余力

会議室の処理能力、カメラ、マイクは、現在のニーズを上回るものでなくてはなりません。なぜかというと、今はまだリリースされていない機能が3年後には重要となるからです。

調査：この会議室では、現時点で求められていない、どのようなことを行えますか？



拡張性

新たなレイアウトが導入された場合のカメラ、マイク、またはスピーカーの追加作業は、ケーブルの配線だけで済むべきであり、それがプロジェクトになるようではいけません。

調査：室内の配線をやり直さずにカメラを追加できますか？



再構成の柔軟さ

これは明らかに、大規模で影響力の大きい会議室に主に当てはまるものですが、前提条件として挙げておく価値があります。 レイアウトは、会議室のテクノロジーよりも頻繁に変更されます。その会議室を使用する人々は、自分自身でレイアウトを切り替えたり、カメラの視点を変更したり、基本的な設定を調整したりできるべきなのです。

調査：会議室にいる誰かが、専門家を呼ばずに、上記3つをすべて実行できますか？



プラットフォームの独立性

会議室は、企業が使用する会議プラットフォームの選択が少なくとも1度は見直されるほど、長く使用されます。

調査：来年プラットフォームを切り替えるとしたら、この会議室の何を取り替える必要がありますか？



オーディオとビデオを超えたセンシング機能

会議室には、空気質、温度、湿度、照度、在室状況、利用状況といった室内環境を自動的に測定する機能が求められます。こうした数値により、IT 部門や施設管理部門は、会議室の環境が快適でなくなったり健康的でなくなったりした場合、誰かが不満を言う前にそれを把握できます。

調査：この会議室は、誰かが報告しなくても、空気がよどんでいることや室温が適切でないことを知らせてくれますか？

以前の AI カメラの分析の中で、カメラがスペースの利用状況を認識し、それに応じてフレーミングを調整する機能を「コンテキストに応じたルームインテリジェンス」だと説明しました。

ルームスケールインテリジェンスとは、同じ原理を個々の会議室だけでなく、施設全体に適用したものです。これによって、次の10年間に対応できる会議室と、対応するために作り直さなければならない会議室の運命が分かれます。

> ***ルームスケールインテリジェンス***（名詞）*空間や施設内部のいずれかのデバイスではなく空間や施設自体に備わっている、拡張、再構成、そして10年にわたるプラットフォームの変更に耐えることができる能力。*



Rally Bar 2および Rally System 2 Pro：
すべての会議室にルームスケールインテリジェンスを

ロジクールの次世代ビデオ会議ソリューションである Rally Bar 2と Rally System 2 Pro は、すべての会議室が共有するレイヤーと、各会議室で選択されるデバイスという2つの立ち位置において、以上の5つの基準に応えます。会議室のサイズは依然として重要です。中会議室と分割可能な多目的スペースでは、これまで通り異なるハードウェアが必要となります。変わったのは、デバイスを選択する前に決定すべき事項の多さです。

種類に関係なく、すべての会議室が得られるメリット

ロジクール Link は、建物内に既に敷設されているネットワークケーブルを使用してビデオとオーディオを伝送するため、カメラ、マイク、またはスピーカーを追加する場合も、ケーブルを配線するだけで完了します。

CollabOS は、すべてのデバイスに同一のオペレーティングシステムとセキュリティ基盤を提供します。これは Microsoft Device Ecosystem Platform（MDEP）を基盤に構築されており、同じハードウェア上で Teams、Zoom、Meet を実行できます。

ロジクール Sync は、ビデオバー、モジュール式システム、ルームコントローラーを1台のコンソールで管理します。さらに重要なのは、IT 部門がそこですべての会議室のセンシングデータを確認できるということです。使用率、空気の質、温度の測定値が1か所に集約されるため、そこで IT 部門は問題のある会議室を特定し、最初のチケットが発行される前に対策を講じることができます。

このような共通のレイヤーは、5つの基準のうち**拡張性**、**プラットフォームの独立性**、**音声と映像を超えたセンシング**の3つに関して、会議室に何を設置するかを決める前に正解を提示します。いずれもデバイスではなく施設に属するため、会議室を刷新しても維持されます。

ロジクール Spot は、既存の会議室にこれらの機能の一部をもたらします。既存の会議室やビデオシステムのないスペースにセンシング機能を追加し、空気の質、温度、在室状況を測定し、誰も来ない場合は予約を解放します。これにより、古い会議室やビデオ非対応のスペースも、新しい会議室と並んで Sync にレポートされるようになります。

残りの2つの基準である**性能面の余力**と**再構成の柔軟さ**は、会議室に導入するシステムによって決まります。

会議室によって異なる要素

機能	Rally Bar 2	Rally System 2 Pro
会議室タイプ	標準的なレイアウトの中〜大会議室	大規模、分割可能、 多目的スペース
概要	一体型ビデオバー	モジュール式システム： Rally AI Camera Pro、 Rally Mic Pod 2 × 2、 Rally Speaker 2、 RoomMate 2 Pro
対応する基準	性能面の余力	再構成の柔軟さ
重要である理由	次世代の処理能力と内蔵センシング機能により、今日の会議室のセットアップで、プラットフォームに今後追加される機能にも対応できます。	現在はインテグレーターが必要とされるスペースでも、会議室内の人々がコントローラーからレイアウトを切り替えることができます。分割可能なセットアップは Sync で構成できます。

ほとんどの施設にはどちらも必要です。問題は、*どの会議室にどちらを、いつ導入するか*です。

共有レイヤーと各会議室に適したデバイスを組み合わせることにより、3つの面でメリットが得られます。次のセクションでは、以下についてそれぞれ説明します。

- **体験：** 会議が始まった瞬間に従業員が気づくこと。
- **運用：**1台のコンソールやその背後にあるセンシングデータを始めとする、IT 部門や施設管理部門が毎日扱うもの。
- **拡張性：**あらゆるタイプの会議室で一貫して維持される同一のアプローチ。



ルームスケールインテリジェンスがもたらすもの

共有レイヤーと各会議室に適したデバイスを組み合わせることにより、3つの面でメリットが得られます。それは、会議そのもの、それをサポートするチーム、そして会議が行われる施設です。



性能面の余力



再構成の柔軟さ

体験：すべての会議の最初の1分間

従業員は会議の最初の1分間でその会議室に対する評価を決め、一度決めた評価を変えることはありません。

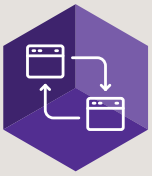
- **Rally Bar 2と Rally System 2 Pro** が自動的に会議室をフレーミングするため、テーブルについている参加者全員が映し出されます。Rally System 2 Pro には、プレゼンターの動きに合わせて追従するプレゼンタービューも搭載されています。
- **RightSound 3** が話者に焦点を合わせ、エコーや室内のノイズをカットするため、リモート参加者は無理なく聞き取ることができます。
- **分割可能なスペースでは**、エンドユーザーが室内の Tap コントローラーから新しいレイアウトに合わせてシーンを切り替えるか、管理者が Sync で同じことを行うことで、会議室が適宜調整されます。

私の経験では、最初に消えるチケットは、IT 部門が再現し得ないものになります。なぜ再現できないかというと、何一つ壊れていなかったからです。





オーディオとビデオを超えたセンシング機能

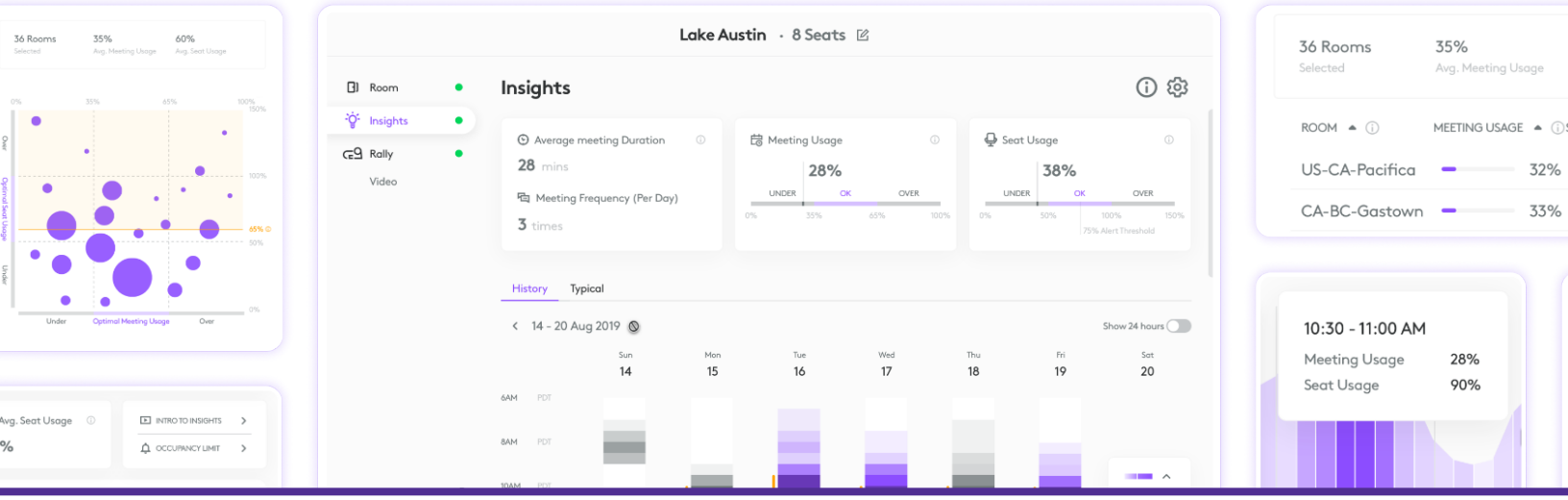


プラットフォームの独立性

運用：すべての会議室を一元的に可視化

一つの会議室だけをサポートするチームはありません。IT 部門や施設管理部門は、フロア、キャンパス、あるいはポートフォリオ全体をサポートしており、通常、誰かから苦情が出るまでどの会議室に問題があるのかを知ることはありません。

- **ロジクール Sync** は、すべてのロジクールデバイスを1台のコンソールから管理します。アラートや ServiceNow との連携により、苦情が来る前にダッシュボードで問題を把握できます。
- **Rally Bar 2** は、使用率、空気の質、温度、湿度を測定します。または、ロジクール Spot を古い会議室やビデオ会議非対応の会議室に追加すれば、すべての情報が Sync に報告されます。
- **使用されなかった予約**は自動的に解放されるため、誰も使用していない時間はプールに戻されます。
- **CollabOS** はすべてのデバイスに共通のセキュリティ基盤を提供するため、セキュリティレビューは一度で済み、デバイスは共通の経路で更新されます。



アナリストの見解：

「IT チームに会議室の状況を尋ね、何が起こるか見守ってください。誰かがコンソールを開くと、別の誰かがそのコンソールでは3階の状況はわからないと言います。自己報告型の施設は、その2つの回答の間のギャップを埋めるものです」

— Craig Durr（チーフアナリスト、The Collab Collective）



拡張性

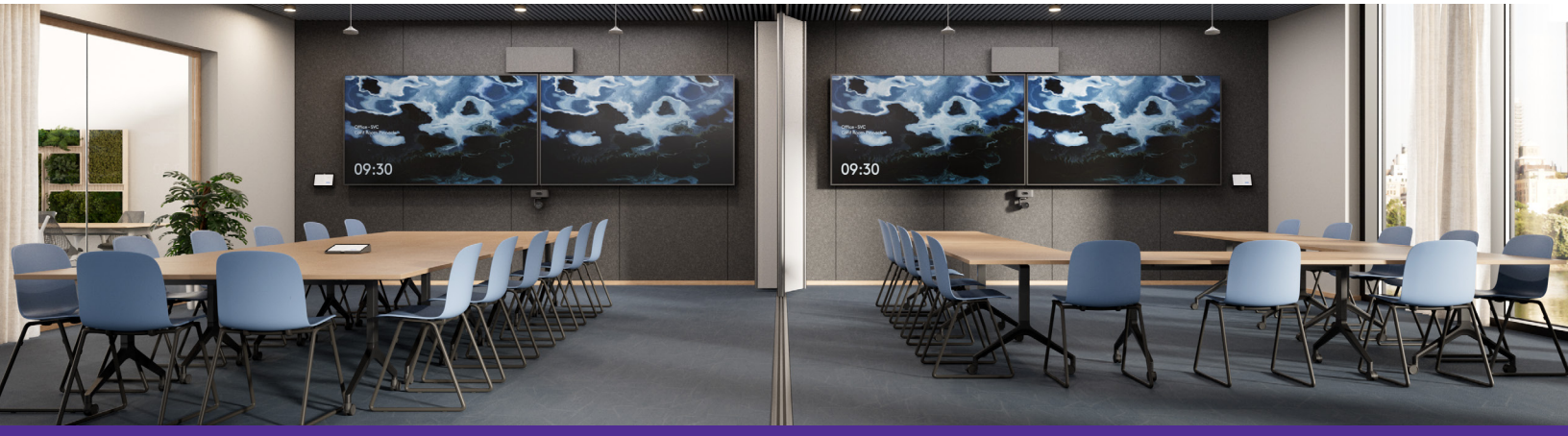
展開性：あらゆるタイプの会議室に、一つのアプローチを

すべてのスペースに対応できる単一のデバイスはありません。重要なのは、会議室の機能拡張、管理、機器の交換を一貫した方法で行えることです。

- **ロジクール Link** を使用すると、Rally Bar 2および Rally System 2 Pro のある会議室に、ケーブルを配線してカメラとマイクを追加できます。また、Rally System 2 Pro のある会議室が拡張される際は、最大規模のスペースに対応する Rally Speaker 2 Pro と Max を使用して、スピーカーも拡張できます。
- **Rally System 2 Pro の分割可能なセットアップ**は、サービスを呼ばずに、Tap、Sync、または API から切り替えることができます。
- **ハードウェアは廃棄を念頭に置いて構築されています。**ポートフォリオ全体で再生プラスチックが採用され、Rally System 2 Pro には低炭素アルミニウムが、Rally Bar 2にはアルミニウムユニボディが採用されており、機器一式を廃棄する際には部品を簡単に分離できます。







Link | CollabOS | Sync | *さまざまな会議室に、一貫したアプローチを。*

私の評価：
ロジクールは5つの基準に対してどのように評価されるか

ロジクールはこの電子書籍のスポンサーであるため、このスコアカードは1人のアナリストの見解としてお読みいただき、検討中のすべてのベンダーに対して同じ5つの調査を実施してください。これらの基準のいくつかは、2026年においては必須条件となっています。重要なのは、ベンダーがどこまで進んでいるかです。

 性能面の余力	Rally Bar 2の次世代の処理能力と内蔵センシング機能	**基本要件。すべての新しいデバイスが性能面の余力を謳っています。ロジクールのサポート実績は、まさにその主張の信憑性を高めています。**
 拡張性	ロジクール Link により、建物内に既に敷設されているネットワークケーブルを使用して、カメラ、マイク、スピーカーを追加できる	**他とは一線を画す。これは現行の世代では新しい機能であり、今日のほとんどの会議室の構築のされ方とは明らかに異なっています。**
 再構成の柔軟さ	会議室のレイアウトを Tap、Sync、または API から切り替えることができる	**他とは一線を画す。インテグレーターが必要だった会議室も、今では利用者が自分たちで構成を変更できるようになりました。**
 プラットフォームの独立性	Teams、Zoom、Meet を同一ハードウェアで利用可能	**基本要件。これは、真っ当なベンダーであれば当然期待されることです。**
 オーディオとビデオを超えたセンシング機能	内蔵センサーに加え、既存の会議室やビデオ会議非対応の会議室向けには Spot を、Sync で一元管理できる	**新しいデバイスで当然求められる基本要件。既存の会議室にセンシング機能をもたらす Spot こそが、ロジクールの強みです。**

確認可能なサポート実績：

2021年に発売されたオリジナルの Rally Bar をすでにお持ちですか？ もしそうであれば、その Rally Bar がこれまでに18回の CollabOS アップデート、Android 12への移行、そして2030年までのサポートをすべて無償で受けてきたことをすでにご存知かもしれません。このことはまさに、10年近くにわたるサポートが実際にどのようなものであるかを示しています。

アナリストの評価

「ロジクールの次世代製品は、5つの基準すべてを満たしています。私が特に優れていると感じるのは、変化し続ける会議室において最も重要な2つの点です。それは、ケーブルを配線するだけでデバイスを追加できること、そして利用者が自分たちで会議室の構成を変更できることです。10年先までの使用を見据えたスペースの設備更新を計画しているなら、この製品ポートフォリオを概念実証テストや評価に含めるべきです」

— Craig Durr（チーフアナリスト、The Collab Collective）



次のステップ：
どこから始め、どのような順序で進めるか

順序立ては、最初に購入する際の規模よりも重要です。
各ステップから次のステップへと、情報が受け継がれるようにする必要があります。

1. **すべての会議室を1つのコンソールに集約します。**ロジクール Sync の導入は、最も費用のかからないステップです。Sync は既存の会議室で機能し、導入以降のすべての状況を可視化します。

2. **優先度の高い会議室で5つの調査を実施します。**使用率と利用状況のデータを使用して、どの会議室を最初に調査するかを決定します。ほとんどの組織は、コストが発生する会議室ではなく、苦情が発生する会議室を再構築します。

3. **まずは1つの分割可能な会議室から始めます。**分割可能なスペースや多目的スペースは、5つの基準が最も重要となる場所です。ここで Rally System 2 Pro が真価を発揮します。

4. **設備の更新時期ではなく、会議室のタイプに応じて標準化します。**会議室に求められる要件は、その利用方法によって決まります。更新時期に基づいて標準化を行うと、互換性のない3世代の機器が組織内に混在する結果となります。

会議室のあり方を決定づける判断は、機器を壁に設置する前に行われるものであり、一度決まると数年間は見直すことが困難です。ロジクールは、最も要求の厳しいスペースにおいてそうした判断を下す組織のために、Rally Bar 2と Rally System 2 Pro を構築しました。上手くいっても、誰からも感謝されることはありません。唯一の成功のしるしは、その会議室の使用を人々が避けなくなることです。

アナリストの見解：

「8年経っても時代遅れを感じさせない会議室がある一方で、わずか2年で、誰もが不便を工夫しながら使用している会議室も見てきました。その違いを生んだのは決して予算ではありません。導入する設備の仕様を決める際に、どのような点を検討したかということです」

— Craig Durr（チーフアナリスト、The Collab Collective）

会社情報



Craig Durr 氏は、職場のコラボレーションとコミュニケーションに重点を置いた業界アナリスト企業、The Collab Collective の主任アナリスト兼創立者です。Craig 氏は、アナリスト、研究者、基調講演者として活動する中で、企業、従業員、顧客の間でシームレスなつながりを可能にするサービス、テクノロジー、およびデバイスに関するインサイトを深めてきました。

テクノロジー以外にも、仕事における複雑な人間的側面についても調査し、得られた知見を、労働力、職場、現代の業務体験のワークフローに分類しています。これらの要素を明らかにすることで、未来の職場に不可欠なテクノロジー、生産性、およびビジネス戦略の間の複雑な相互作用の解明に貢献しています。

cdurr@collab-collective.com　craigdurr　@craigdurr

collab collective

職場のコミュニケーションとコラボレーションの進化する環境について、データに基づいた分析と、現在のハイブリッド環境を形作る労働力、職場、ワークフローに関する高度な知識を組み合わせて、深いインサイトを提供します。当社のアナリストは、職場のコラボレーション、顧客体験、従業員体験のテクノロジー、そして創造性とワークフロー管理のための企業アプリケーションの専門家であり、これらのソリューションが実際の業績にどのように貢献するかについて包括的な理解を提供しています。

www.collab-collective.com

logicool

ロジクールは、ビジネスの成功に貢献し、仕事や制作、ゲーミング、ストリーミングにおいて、人と人をつなげるソフトウェア対応のハードウェアソリューションを開発しています。当社の使命は、人々とデジタルの世界を結ぶ接点として、人々と地球に優しい方法で、仕事と遊びにおける人間の可能性を拡大することです。1981年に設立された Logitech International は、スイス連邦の株式公開企業であり、スイス証券取引所（SIX：LOGN）と NASDAQ Global Select Market（LOGI）に上場しています。ロジクールとビジネス向け製品、エンタープライズソリューションについて詳しくは、**www.logicool.co.jp/business**、当社の**ブログ**、**Logitech Business**、または **@LogitechBiz** をご覧ください。

www.logicool.co.jp